

究研方詁

號 月 八



六發盟聯話童市日

(前例右より) 高田、成田、松原、松美、東野、平野の諸氏。(東京本部)
(中例右より) 中島、月江、大島、小川、鈴木、白井、錦織、峯尾の諸氏
(後例右より) 宇野、兼高、大熊、井部、松崎、近藤、松原の諸氏



◇松原泰道氏の送宴

東京の講師松原泰道氏が四月中旬岐阜の僧坊に入るので八日送別會を開き寄書をした。

昭和六年四月花すづりの夜川崎やに
用十道井一
おたつ別れやう。
松原泰道

松ノ木コドモ會

松原よね
松原泰道

私の家と申しましてもそれは臨濟禪派の寺ですが、その門前に二百年程経たと思はれる大きな老松があります。周圍は一丈五尺程もありませうか。ですから古い昔から「龍源寺」と言ふ寺稱があるにもかゝはらず「松の木のお寺」と云ふ名で通つておりました。その通稱をそのまま新らしく生れ出る「コドモ會」の頭に附したのでありました。

時代放れのした、骨董的な、ぎこちない名ではあります。然しその對象は成年者でありました。児童を對象とは致しておりませんので、再三私に「コドモ會」の必要をすゝめます。老いた母も心から努力すると申します。

それに私も淺い經驗しか有しておりませんが、かねてからコドモを集めたいと存じてゐましたので、父の賛成を父とし、母の熱意を母としこゝに始めて「松の木コドモ會」が生れ出了のであります

第一回を去る二月十二日午后一時から開きました。コドモは百五十餘人參會致しました。それは私の母校御田小學校の須藤先生のお力添への賜物であります。さうして、この日の始終、丸山、小川兩先生に種々お世話を頂きました。

お話は

虎ちゃんの話

須藤先生

バルチサン

丸山昇先生

孝ちゃんとお馬

小川一郎先生

第二回 二月二十六日(晴)午后一時開會會員百七拾名

甚吉鯉

須藤先生

一ばん大事なもの

松原泰道

尊き犠牲

中根眞雄先生

桃太郎後日譚

小川一郎先生

午后三時十五分閉會此日始めて佛前參拜禮讚文奉

讀を致しました。この第二回目迄に大きな収穫が

ありました。

それは最初のコドモ會をする前に立看板を出しましたが、忽ちコドモ達の爲に破かれ終ひました。七日の間に何度張り替へた事でしたらう。然

し第二回目にはもう少しもそんな事はなかつたのです。風で看板が倒れた時にコドモ達はそれを起

してちやんと立て直してくれる程にコドモ達は變つて來ました。僅かな一小事には過ぎませんが、如何にコドモ會がコドモ達の心を教化するかと言ふ事は十分に物語る表象であらうと信じます。こ

の事があつてから私達はます／＼コドモ會の使命の大切な事を知り、責任の重い事を知りました。私達はます／＼懸命に努力致さなければなりません。然し経験の浅い私達に取つては重い大きな教めであります。たゞ先生と、先輩諸兄姉の御指導とに依つて、精進致したいと存じます。

私達は樂しんで自己の義務に最善の努力を致します、樂しんでコドモ會の爲に、コドモ達の爲に働く所以であります。先輩諸兄姉に御挨拶をかね

(松ノ木コドモ會が松原泰道氏とお母様のよね子女史によつて創設されたといふことは其當時から伺つて居まして、非常に結構のことと思ひました。世のお母様が松原氏のお母様のごときお心でこの事業をお助け下さつたらどんなに理想的の發達することでせう。私は實に心嬉しいことに思つてこの御紹介を會員の皆様にいたす約束であつたのです。

ところが第四號には松原氏の童話をのせる第五號は貢不足といふやうな譯でこの號で御紹介することになりました。悪しからず思召下さい。松美佐雄)



◇聯盟徽章

聯盟徽章の新らしいのが出来ました。今度のは六分圓で稍小型になりました。會員は是非佩用して下さい。代金は郵稅とも一個金八拾錢であります。實物は大層美術的のもので

す。正會員は必ずお求め下さい。

月と語る

岐阜松原泰道

—此断章を聯盟の諸兄姉に捧ぐ—

Nさん。

月のないあの晴い夜に、東京を去つてから、もう一年半近くを此僧院で過しました。ホーム返送つて下すつた方々のお顔を

思ひ出しては、今頃はみんな子供達を相手に、元氣にお話をしゆられるだらうなど考へる度に、私の學生生活、とりも直さず子供達と暮らした昔が思ひ出されます。お別かれしたあの夜は、疊つてゐたが、今宵は満月に近い月が、くつきりと空に浮いて、冴えゝとした夜氣が身に沁みます。

み堂の様に坐を組んで、静かに瞑目すると聞えるものは裏の雜木山になる木の葉を奏でる哀調と時折消魂ましくなく五位鶯の聲許りです。立處皆眞、凡てがフカームアリマターだと説く禪、それを活かすと殺す

とは、各自の精進一つだと聞かされる度に愚圖々々してゐてはいけないと云ふ魂の囁きを聞きます。

Nさん。

月のいゝ晩には、きつと君と二人で縁に腰かけて、種々と議論しあつた頃を、君は覚えてゐらつしやいますね。私はいつもそれを思ひ出します。今の私の左右には、みんな同じい黒衣の衲僧が靜坐してゐます。

Mさん。

嘗て君と、童心の定義を云爲した事がありましたね。そして君は良寛が持つてゐたと傳へられてゐるのは、アプローマルなもので、本當の童心ではないと喝破せられました、それには僕も無條件で共鳴しまします。然しそれが誤解であつた事を、今日主張せずにはおられなくなつたのです。子供

を、今から楽しんで待つております。
Mさん。

晩春の風を頬に受けて、綱代笠を傾けながら歩いた中仙道の兩側の畠には、「げんげ草」そのままです。私はねんねのお里の歌詞を誦むと同時に、子供に與へた私自身の遊戲を思ひ出し、如何にそれが力なき自己陶醉に過ぎないものであるかを痛歎しました。いくらそうでないと頑張つて見ても、子供を通して子供をロボットとして自己満足に過ぎないものです。無心にげんげ草の上を舞ふ蝶の踊り、なぜ私は學ぶ事が出来ないのでせう。

の持つ心と、大人の持つ心とは紙一重の距たりもあつてはならないのだ。大人の心が即ち子供の心でなければならないのだと、云ひ古されたあの言葉を、別の意味で、私は新らしく解釋し度いのです。

老禪師は云はれます。ほろ／＼と鳴く山鳥の聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ——この歌をみんなは知つてゐるだらう。が然し、まだ／＼究竟の境涯には達してゐないのだ。この歌人はその心境を、口にする前になぜ山鳥に抱きつき得なかつたのか。抱きつき得てこそ、初めて彼は大自在の境涯に遊び得たであらうものを」と。私は非常に興味深く感じました。かうした話材に從來餘り接してゐない點もあつたでせうけれど。ことごとしく説き立てる間に、子供に接して有形無形を問はずに、子供の世界に蘇直に飛び込み得る人、それにそ正しい良寛であり情操に生き得る童話家ではないのでせうか。理屈は抜きです。そしてその理屈抜きの境涯を理論化する事に、力むべきではないのでせうか。然し私達は良寛を氣取る人々をうんざりする程見せつけられ

ましたね。僧俗を問はずに。更に云へば彼等こそ隠れもなき變態人ではないでせうか。

Sさん。

秋も近づいた或澄んだ朝の、臨濟錄提唱の後、老師は次の様な事を云はれました——圓朝は稀代の名講釋師だつた。山岡鐵舟が或時彼を招いていつた。(わしは幼い頃よく母の膝にもたれて、母から桃太郎の話を聞いた。何度も何度も飽きもせずに、母は話してくれた。私も少しも厭とは思はずに母の口を見ながら聞いたものだつた。母在まさなくなつてからも、母を戀ふ度に桃太郎を思ひ出す。遠く旅に出て郷愁に襲はれる時、我にもなく眼の熱いのを感じるのだ。そして母のあの温かい膝と、桃太郎の物語りを——名師と謳はれる貴公から桃太郎を聞いたらどんなにか面白いだらう。そして私は母を戀ひたいのだ」かうして懸ろに、鐵舟は圓朝に請うた。黙つて額を疊につけて聞いてゐた圓朝は、をづ／＼と其時頭を上げた。圓朝はなぜかびつしよりと額に汗をかいてゐながら、逆も私輩にはお母

様のお話は出来かねますと、おろ／＼しながら許しを求めた。無學な老ひた母がなし得る、あの容易な桃太郎を、名人圓朝がなぜ出来ないのだらうか。鐵舟は暫らく拱手して考へてゐたが、やがてハタと膝を打つてよろしいと云つた。ほつとして圓朝が見上げる鐵舟の眼には、涙が一杯に宿つてゐた。それを見て圓朝も思はず、はらはらと落涙したと言ふ——老禪師はこゝで一寸息をついて云はれた。母はとりも直さず子の母である。匍へば立て、立てば歩みを願ふあの親心——そうした母の優しい氣持が、拙なくとも桃太郎の話に表はれるのだ。それは母のみが話し得る桃太郎であつて、決して嘶の桃太郎ではなかつた。この心境は講釋師の眞似し得る所ではない。彼はお嘶の桃太郎しか話し得ないからだ。名人は遂に名人であつて、母には成り得なかつた。子を愛する三昧無我の境こそ母の桃太郎だ。この點を察し得た圓朝こそ、流石名人と云はねはならない——何と暗示に富んだ話ではないでせうか。童話家よ男も女も先づ母たれ！ 母の心を體する童話家よ、お

ん身こそ母に次ぐ愛の童話家だ。そうして
そらあるべく精進する所にのみ童話家の生
命があるのでないでせうか。

Kさん。

街の保育所の前を行鉢して通つたら、美
くしい若い保姆さんが、慌てゝ育児を遊戲
室の中へ押し込みました。彼女の漆黒の袴
の紐には、おゝ何と銀の十字架が輝いてゐ
たのです。同様に十字架を目の敵の様にす
る自称佛教育兒家も私達は知つてゐます。
なぜさうまで視野が小さいのでせう。

窓邊へ忍び寄る冷たい風、「秋立つ日」と
曆が教へてくれたこの日の夕べ、空に流れ
るあの銀河の光り、そぞろに郷愁の念に打
たれます。さりながらその一面、再び子供
達に接し得る日の近づいて來た事を思ふ時
何だか胸のときめきと、しつかりやらうと
云ふ魂の聲が聞えて來る様な氣がします。
お互ひにしつかりとやりませう。ペンを取
り始めた時は、冬の夜の月を見てからであ
つた。そして奇しくも又此夜こそ亡き魂祭
る盆のあの圓るかな月を中天に仰ぐので

す。とろとろと迎へ火たく新盆の家の寂し
くも寧い幼き者のすがた、空には冷朗の月
ありひたゞ身に迫る秋の夜の爽かさ、君
たちのすがたを、君たちの聲をはつきりと
感じるのです。

◆碧南支部の講習会員

第四十一頁の碧南支部の實演童話會に出
席したのは左の方々であります。

◆實演會員 寺田鉢司氏、原田清氏、夏
目靜男氏、高須市郎氏、竹田登志雄氏、蜂
須駕喜四男氏、伊澤時二郎氏、境了祥氏、

◇聽講會員 鈴木富美夫氏、加藤正男氏
犬塚太郎氏、沓名金作氏、大澤宗雄氏、清
水玄道氏、杉浦義壹氏、田村等氏、荒川達
雄氏、鈴木建次氏、小笠原徹氏、占部傑氏
本仙三氏、板倉敏雄氏、吉田とら氏、杉浦
まさ子氏、杉浦武夫氏、鈴木勇導氏、板倉
恵三氏、小島きみ氏、榎原治子氏、小島す
わ子氏、小島たま子氏、木村みつ子氏、永

秋から春へかけてお話の世界がひろ
がれてまゐります。

子供にお話をきかせ、喜ばせ、心を
淨化させ、成長させて行くことは、大
人の義務であります。

そのお話の種は何を標準にすればよ
いでせう、今の日本では「話方研究」
が最も理想であります。

「話方研究」はお母様でも座右の友と
せねばなりません。まして子供の先生
は、子供の保姆は。

どうぞ知れるかぎりの人々に日本童
話聯盟の新會員となることをおすすめ
下さい。

(1) まだ教室童話學の掲載號は始
めから残つて居ります。

(2) 愛らしき幼兒お話集も澤山に
あります。

お申込みの新會員には贈呈いたしま
す。この贈呈も利益を見ず眞にお國の
ためにと思ふから出来るのです。

どうぞ會員の御紹介を願ひます。

◆新會員專集

童話 椿 咎く 頃 松原泰道

やうやく春が終らうとする頃、港を出た船が、その南の國の沖を通る時、みなさんは甲板に出て岸の景色を眺めるのを忘れてはなりません。

ゆつたりと流れる大きな川で、區切られた一つの村、見渡すところ青い若葉で濃い緑にそめられてゐます。この海岸一帯は「椿の村」と呼ばれてゐる程、一杯に椿の花が咲くのです。大川の兩岸には、恰度櫻並木の様に白紅、とりどりの椿で隈取られてゐたし、村境の橋の袂には、眞白い大きな椿の古木が二本立つてゐます。村の中程には恰好のよい丘があつて、そこは一段と優れて美くしい花が咲きます。東よりの風が強く吹く時など、沖を通る船の客室にまで、高い香りがたゞよつてきます。

丘の上には、小さい可愛いお寺がありました。そこに月晃さんと云ふ若いお坊さんがたつた一人ゐました。

村の子供達はこの和尚さんと大の仲好しでした。

朝だと――。

『和尚さん。お早う。學校へいつてくるよ』

『お早う。太郎さんかい。しつかり勉強してくるんだよ』

『お晝頃だと――。』

『今日は！ 和尙さん』

『今日は！ 次郎さん』

『和尚さん。いゝお天氣だね』

『いゝお天氣だね。次郎さん』

『濱へでもつれてつてくれない？』

次郎さんと和尚さんは、濱へつれ立つてゆきます。
夕方だと――。女の子が

『和尚さん。おやすみ！ 何だか雨が降り相ぬ』

『花ちゃんもそう思ふのかい、わたしも心配してゐるん

だよ!』

『そう! ちやわたしが占つてあげるわ』

花ちゃんは右足をぽいと振りました。赤い木履は、ころくと轉つて裏向きました。木履の鈴がりんりん鳴るのを聞きながら

『まあ、明日は雨だわ。表が出ればいゝのにね!』

『本當に。今晚中に降るかも知れないね』

「和尚さんとこ、洗濯物が干してあるのでせう。早くい

れないといけないわ』

『そうだね。有り難う』

かうして毎日過ぎました。

『今日はお掃除をするから、みんな手傳つておくれよ』

和尚さん始めみんなで、お掃除を初めました。庭一杯に

散つた椿の花、赤い花に白い花、大きい花に小さい花。

『まあ、綺麗だこと、わたし花だけ集めるわ』

花ちゃんは糞を糞の様に、長くして歌を唄ひながらつきました。

庭には一本不思議な椿がありました。外の椿が綺麗に咲いてゐるのに、その樹だけはどうしたのか、花が開かず、蕾の儘ぽつんぽつんと落ちて終ふのです、太郎さんが

が

『和尚さん、此の椿だろ。花の咲かない椿と云ふのは』

『あゝ、ぞうだよ。不思議な椿なのだ!』

『こんな綺麗な蕾なのにね。白と赤と縞になつてゐる蕾なんか、外にないわ。惜しいわね』

花ちゃんが蕾を拾ひながら云ひます。

『花ちゃんが、そうやつて花をさしてゐると、此國の昔のお姫様を思ひ出すよ。此椿には昔からの話が傳はつてゐるのだよ』

『その話をしてくれない?』

『あゝいゝよ、ちやみんなお集り』和尚さんのまわりへ圓を描いてしやがみました。

『此山には、昔お城があつたんだよ。この本堂がその趾だ——その頃——椿の村が椿の國と云はれたころは、王

様は大變に情深くて戦争もお上手だつた。近所の悪い國

が攻めて來ても、あべこべに打ち負かされて、椿の國の

王様と云ふとみんな怖がつたものだ。眞赤な鎧を召して眞白な馬に跨つて、眞先に立つて進む王様を見ると、みんな逃げ出したよ。それに又大變に仲のよい賢いお家來が二人ゐて、いつも王様をお助けしてゐたから、國の勢は大したものだつた。その頃も今の様に椿が一杯に咲いた、此の白赤だんだらの椿も綺麗に咲いた。王様の姫様は、此の花が一番お好きでね、あゝやつて花ちゃんの様に毎日椿の花をさしてゐらしたよ』

『けれども——』そう言つた時、今は決して咲かぬ、だんだら椿の蕾が一つぱたりとおちました。

『けれどもね、二人の家來の間が、不鬪した事から仲悪くなつて終つてね、それにつれて國も弱くなつて來たんだよ。王様も心配なすつたが、お姫様は殊の外御心配になつてね。種々と二人の家來を諫めたのだけど駄目だつた。その中近所の國から攻め立てられて、其川の側まで

敵軍が押しよせてきた』

「お姫様。大變です。お父様がお亡くなりになりました」

——家來が知らせてくれた時、お姫様は、此椿の幹にもたれて、眞蒼な顔をしてゐた。そして間もなくわつと云ふ聲と共に、お城から眞黒な煙があがつた。敵が城に火をつけたのだ。お姫様はじつとそれを見てゐましたが、

やがて「みんなさへ仲よくしてゐてくれたならね」と仰言るとぱたりとお倒れになつて遂にその儘お亡くなりになつて終つた』と和尚さんは暫らく黙つてゐましたが、

『それからこの椿が咲かなくなつて終つたのだ。お姫様が悲まれた様に、此の椿も悲しくて悲しくて仕方がないんだね。ほら、またおちたよ』

『お姫様が可哀想だわ！』

花ちゃんが叫びました。

『このだんだら椿だつて、可愛想だ』

と太郎さんも云ひまし。

『そうだ。お姫様も可哀想だし、椿も可哀想だ。だから

みんな仲よくするんだよ』

『仲よくしたらこの椿が咲くかしら』

と誰かが云ひました。

『咲く』

和尚さんが自信ありげに言ひました。

『本當に仲よくしたらだね。じや、どうしたら本當に仲よくなるの?』

『それはね、君達で考へてごらん。わたしが教へたので
は駄目だ』

『ぢや、太郎君、本當に仲よくしやうね。もう喧嘩なん
か決してしないよ』

『ああ仲よくしやう。本當だぜ』

次郎さんは太郎君と握手をしました。

『は、は、は、駄目だよ。そんな仲よしでは』

和尚さんはそう言ひながら、又庭を掃きつけました。

それからと云ふものは、みんなあまり喧嘩をしません

でしたが、だんだら椿は相變らず蓄の儘にほろくと散ります。

『和尚さん、駄目ぢやないか。ちつとも咲かないよ』

でも和尚さんはたゞにこくしてゐる許りです。

『まだ、わたし達が本當に仲よしになつたのではないか
らでせう。ね、和尚さん。そうでしやう?』

と花ちゃんが云つても和尚さんはやはりニコくしてゐ
らつしやるだけです。

その中に椿はすつかり落ちて終ひました。一つも花とはならず。秋が来て冬が來るとだんだら椿は、一しほ寂し相にしょんぼりしてゐました。

『來年はきつと花を咲かせようね』

太郎さんはみんなと相談をしました。

『どうしたら本當に仲よくなるんだらうなあ』

『僕達は喧嘩なんかしないのだけれどね』

『わたしだつて去年から連もおとなしくなつたつてお母様から賞められたわ。だから來年はきつと咲いてよ』

『和尚さんは何と云つた?』

『おい、蓄を持つたぜ』

『やつぱりね、まだ／＼だつて』

『チエツ いやになつて終ふなあ』

『三月の試験がすむと、みんな一年づゝ進級しました。』

『大部、大きくなつたね。あいつが明日咲くかも知れな
いよ』

『おい、村の椿がもうちき咲くね』

『うん、あのだんだら椿も今年こそ咲くといゝだがなあ』

『次の朝みんな楽しんで集りました。一人がこわごわそ
つと見上げました。』

『あつ!』

『わたし、何だか嬉しい様な怖い様な氣がするわ』

『おい! 咲いてゐるかい?』

『僕だつて相だよ』

『前の子は黙つてゐました。』

『だめ／＼そんな氣がする中は決して咲かないよ』

『あらッ』

『あつ!!』『あら!』

『いつの間にか和尚さんが後に来てゐらつしやいました』

『そんなら、きつと咲く!』
女の子が何か拾ひあげました。それは一番大きかつた
昨日の蓄だつたのです。みんながつかりしました。

『そんなら、きつと咲く!』
太郎さんが頑張りました。

和尙さんも黙つてゐます。がつかりする日が毎日續き
ました。去年の様に蓄を持つて去年の様に咲きもせずに
散つてゆきます。

去年の様に夏が近いつて来ます。村境の大椿も川沿ひ

の椿も、野のも山のもみんな蓄を持つて、それか

らみんな元氣に咲きました。子供達は一人残らず丘の上
のあの椿の下に毎朝毎晩おりました。

『ああ』みんなためいきをつきました。

その中に子供達に悲しいしらせが傳はりました。その
日は朝から雨が降つてゐました。學校へ行く頃から風も

加はりました。

『和尚さんが病氣だつてさ』

『ほんとかい?』

『お父さんから聞いたんだ。今日かへりにみんなでお見舞に行かう』

烈しい雨風の中を、太郎君と次郎さんが先頭に立つてみんなして、お寺の門をくぐりました。風があるのと、ふとした不注意から太郎さんの傘が次郎さんの傘に當つて、ボツンと穴があきました。

『おい。君、氣をつけろよ』

つい次郎さんは、強い聲で云ひましたので、太郎さんも思はず『なに?』と云ひました。

『君が悪いんぢやないか』

『いや君だ』

そんな事で決して喧嘩をしないと云ふ、あの約束はいつの間にか忘れて終つて、烈しい口喧嘩になりました。吃驚してお友達がとめたのですけど、すつかり腹を立て

た二人は、中々止めません風も雨も烈しくなりました。

『あつ、和尚さんだ』

子供達の大好きな聲が聞えたのでせう。和尚さんが弱々しい足取りで出てゐらつしやいました。

『まあ、和尚さんは傘もさすに!』

女の子がびつくりして傘をさしかけました。太郎さんも次郎君も驚いて喧嘩をやめました。そしてこわ〜和尚さんの顔を覗きこみました。和尚さんは何も云はずに眞つ蒼な顔をして、立つてゐらつしやいます。

『こつちへおいで』

やがて和尚さんは柔しく仰言ひました。でも聲がふるえてゐます。みんなそのあとにつきました。お堂をまわつて庭へ出ました、そしてあのだんだら椿の下まで……雨と風とがさつと音を立てゝすぎました。和尚さんの顔にも着物にもはら〜と雨がかゝります。ほろ〜の蕾のまゝのだんだら椿がまた散りました。和尚さんはじつとそれを見てゐましたが、やがてその一つをそつとうづ

くまづて拾ふと二人の子の前に静かにつき出しました。

二人はその蕾を見て、それから熱で顫へる和尚さんの、手を傳つて目を和尚さんの額にむけました。和尚さんは唇をきりと引きしめて、お目には一ぱい涙をたたへて黙つて一心に蕾を見てゐらしやいます。唇のあたりがびくくと動くと、こぼすまいと堪へてゐた和尚さんの涙

がつつーと一すじ絲を引いて、頬を傳はりました。二人もすつかり悲しくなつて和尚さんにしがみつきました。

『ごめんー ごめんね。和尚さん僕が悪かつたんだ。次郎ちやんごめんね』

その聲を聞くと袂にしがみついてゐた次郎さんは

『僕が悪いんだ。僕が悪いんだ、和尚さんごめんね』

和尚さんは、蕾を太郎さんに渡しました。太郎さんは何とはなしに知らずくに、それを戴くと次郎さんに渡しました。次郎さんは大事相にしつかり握りました。和尚さんはよろよろとしてお堂の方へかへつてゐらつしやいます。みんなそのあとを追ひました。

『おい。太郎に次郎、鐘つけ、早く早く』

雨と風とは意地の悪い程、吹き募ります。和尚さんは昏々と熱にうかされてゐます。子供達は變り番に手拭で冷しました。手拭ひが和尚さんの額の上でふるえてゐます。みんな額を見合して「熱が、熱が」と目で囁きます。和尚さんは謔言を云ひます。

『太郎……次郎……』

その言葉を聞くと子供等は居ても立つてゐられません。

さあつと今迄にない程ひどい音を立てゝ戸が搖れました。みんなはつとした時、和尚さんが

『あつ、危い、……橋が……橋が……』と蒲團の中でも

がきました。

『和尚さん、動いちや駄目。動いちやいや』

蒲團を押へて女の子は、額に手拭をのせかへしました太郎と次郎との頭には、村境のあの橋が朽つてゐるので危いくと和尚さんが平常いつてゐらつしやた事が、稻妻の様に閃きました。

二人は立ち上りました。立ち上つた二人を、和尚さんは精一杯呼びとめました。

「いゝか、二人でつくんだぞ』

苦し相に言ひます。二人は雨の中を、一散に鐘樓へ走りました。一本の綱を一人がしつかりと握りました。二人の瞳は火の様に、一生懸命さで燃えてゐます。

『次郎いゝか！』

『太郎いゝか！』

ゴーン、ゴンゴン、ゴーン……危険を知らせる鐘の音が、雨と風の中を縫つて村中へひゞき渡りました。村の人達はみんな上へ集ります。

『をぢさん、橋が危いぞ！』

二人は大聲でどなりました。かうして村の人達で夜つ

びて橋は守られました。大人達が懸命になつて、夜明まで橋を守つてゐた様に、子供達は一心に和尚さんの介抱をつゞけました。

夜があけました。朗らかな太陽が丘の寺を訪れた時、

和尚さんはばつちりと澄んだ眼をあけて、嬉し相に子供達を見廻しました。その眼を佛様の方へむけた時、

おゝ……。

『おや、あの椿がさしてあるね』

和尚さんはびっくりしました。

『え、今朝方風で折れたのを、勿體ないと思つて持つて來たの！』

と一人が云ひました。

和尚さんは、床の上に手をついて、それを見つめました。

『和尚さん、花が咲く』

『咲くとも！』

『本當に！』

『本當だ！』

雨がやんで陽が照り始めると、和尚様も子供達も本當に嬉し相に、今迄見た事もない、だんだら椿の今は生き／＼として嬉し相に咲くのを見ることが出来ました(完)